



ポイヤウンペの戦い ②

「金成マツ版 虎杖丸」から 文：瀧口夕美 絵：小笠原小夜

うたげに不吉な女

私、ポイヤウンペはある日、育ての姉にこう言った。「いま私たちは、戦いが激しさを増す前のつかの間の休みを過ごしています。そんな時だから、カムイ（神様）や祖先にいのりをささげたい」

姉は喜んで人を呼び寄せ、家にはたくさんの村人が集まった。兄たちはいっしょにいのりをささげ、火の神に向かってそれぞれに手を高くかかげた。うたげが始まると、若い女たちの笑い声が美しくひびいた。

姉が客に酒を注ごうとしたその時、屋敷の外にあるやぐらの上に、空から女が降り立った。その女は、あの不吉な金のラッコがいた石狩村から来たのだった。つかれた顔をして家に入ってきて、客用の席に静かに座った。

私にはもう1人若い兄がいて、その金色に輝く美しいかみから、カムイオトプシと呼ばれている。カムイオトプシは朝日のようにかがやかしい顔を、みるみる不機嫌にしてこう言った。「石狩の女がここに来るとは、不吉なことだ。われわれの祭りの席に、よくもやってきたな！」

兄は素早く立ち上がって刀をぬき、激しくふり飛ばした。女はそれをさけようともしなかった。体は真っ二つに割れ、そのたましいはくやしきのあまり地ひびきを立てながら空へ上って行った。

親戚の1人がおこった。「カムイオトプシ、あの女は何か言いたいことがあるから来たのだろう。なのにおまえは、女が何も言わないうちにきり殺した。神聖なお酒の席で血が流れるとは！」。カムイオトプシも激しくおこって、言い返す。「あの女は、私たちにわざわざいをもたらしにきたにちがいない。おまえは、あの女の味方なのか？」



やがて、2人はたがいに刀をぬいて戦い始めた。手遅れになっては大変と、私は強くさげんだ。「これは全て悪いカムイの差し金だろう。私の行く道の先や後ろには、敵がたくさん待ちぶせしているようだ。カムイオトプシよ、私たちはこれからどうなるのか。このうたげが無事に終わるかどうか、うらなってみてくれませんか！」

カムイオトプシはとてもおどろき、長い間立ちつくしていたが、やがてこう言った。「わが弟、ポイヤウンペよ、私はうらないや術を少しも知らない。私を試すつもりなのか？ おそろしいことだ。……ならばやってみよう」

兄は神聖な窓に近寄って刀をぬき、その窓に刀の刃先をつけて、片方の目を大きく開き、もう片方の目をうすく開けて、刀の刃先をじっと見つめた。やがて、兄は、なみだを流し始めた。

これまでのお話は「まなぶんデジタル」=QRコード=で読めます

